Ⅱ　東院地区の調査（第104次）

調査地は平城宮東院地区にあたり、第22次南調査区と第43次調査区との間にはさまれた6ALR－S・T・U地区である。従来の調査結果によると、当初東一坊大路の道路敷を想定していた位置には、大路推定地上に時期を異にする多くの遺構を検出し、宮域が東へ拡長されている事実を知った。今回の調査では大路の存在や東院西辺地区の性格などの点を一層明らかにすることを目的とした。調査期間は1977年８月４日に始まり、11月12日に終了した。発掘面積は約2500㎡である。

1　遺　構

調査地は、谷筋にあたる低湿地である。遺構はこれらの地山面上にもあるが多くは整地面で検出した。検出した主な遺構は、掘立柱建物21、掘立柱塀15、栗石盲暗渠４、溝45、長方形土壙１、布掘り地業１、井戸１などで、これらの遺構は、大きくＡ～Ｆの６期に時期区分することができる。

Ａ　期

平城宮造営前後の遺構のきわめて少ない時期である。この時期の遺構としては、栗石盲暗渠４条、溝23条、長方形土壙１個所、布掘り地業１個所がある。

SD8601～SD8604　直径５㎝前後の栗石を幅0.5ｍ前後に敷きつめた東西方向の盲暗渠である。それぞれ、11.3ｍ、11.8ｍ、9.0ｍ、11.0ｍ分を検出した。この排水施設の勾配は、西から東にかけてゆるやかに傾斜しているところからSD8585に流しこむ暗渠と考えられる。後期の遺構によってかなり削平されている。

SD8585　南北の素掘り溝でその幅１ｍ、深さ0.7ｍである。この地区の主要な排水路と思われる。この溝全体を発掘せずに、ほぼ溝の同一線上で南北に東西のトレンチを５箇所設け、各トレンチで同規模の溝を確認した。

次にＡ期の中で発掘区の北東から南西にかけて走る斜方向の溝SD8600が作られこの地区の様相が一変する。

SD8600　溝幅は平均３ｍ、南に折れ曲がったあたりからは２ｍ、深さは大体0.6ｍである。全長約92ｍを検出したが、その両端は未発掘地へ延びている。又、こ

の溝の両岸より、護岸用施設としてのシガラミを検出した。遺存状態は非常に良好で、現在でも土木工事でこの手法が使われている点を考えると、真に貴重な遺構である。さらに注目すべき点は、この溝内の堆積土、整地土から多数の木簡、多量の土器が出土したことである。木簡は、堆積土中から107点、この溝を埋めた整地土中から18点の出土をみた。この中で年紀のあるものが9点あり、すべて和銅年間のものである。年紀がないものでもその内容から推して、ほぼ同時期であることが判明した。同時に、この溝から、多様な器種の土器が大量に出土した。平城宮の土器の編年によると、平城宮Ⅰ（710年頃）、Ⅱ（725年頃）に属するものが主体である。また斜行溝を埋めたてた木屑層から出土した土器も平城宮Ⅰ、Ⅱに属する。このことからこの溝の存続期間は、平城宮造営当初から天平初年頃までに限定できる。この遺構は、奈良時代初期の木簡、土器の一括大量出土例として重要である。なお瓦塼類はほとんど出土していない。

SD8645　これはSD8646南北石敷溝を作る為の地拵えである。まず、SD8585を埋め、その上部に幅1.7 m、深さ0.4 mの布掘り地業を行なった後に南北石敷溝を作っている。整地土には明褐粘質土にバラス混りの土を使用している。

SD8646　SD8645の東側を約0.2 m掘り下げで作った溝幅0.4 mの南北石敷溝である。長径0.2～0.3 mの安山岩を溝の側石と底石に使用している。側石、底石ともに残存しているところは調査区の北方で1 mばかりである。この石敷から南に10 mは、側石、底石の抜き取られた痕跡が顕著に残っている。この溝の北延長部は削平されてしまっているものの、布掘り地業は更に北へ伸びている。南は長方形土壙SK8630と接したところで終わっている。この時期に一度本格的な排水路を作ろうとしていたことがうかがえる。

SK8630　東西幅4.6 m、南北の長さ21 m、深さ0.3～0.4 mの長方形土壙である。この遺構がどういう性格のものであるかは今後の検討を要するが、SD8646の南北石敷溝と接しているところから水を溜めるための施設であった可能性が強い。この土壙の埋土からも、SD8600（斜行溝）の場合と同じく和銅、霊亀の年紀をもつ木簡や、平城宮Ⅰ・Ⅱの土器型式をもつ土器が出土した。従ってこの長方形土壙

も奈良時代初期の遺構である。

その他、19条の東西素掘り溝、6条の南北素掘り溝がA期の遺構として検出されたが、遺構としての性格は明らかでない。

B　期

A期の斜行溝、長方形土壙を木屑、木炭殻、灰白色粘土等で埋め立てた後、この地区全体の整地を行ない、調査区の西辺を南北に走る掘立柱で区画し、この地区に官衙的な要素の強い大規模な建物が建ち始めた時期である。

遺構の特徴は、次のような点である。南北棟が多く、柱掘形は不整形で、大きく、深いこと、掘形の埋土と整地土に灰白色粘土を使用している点があげられる。この時期の遺構としては、掘立柱建物6棟、掘立柱塀9条、溝5条がある。

SA 3237　この掘立柱塀は、第22次南調査で確認されたものと一連のものであり、今回南へ32間分を検出した。柱間は10尺等間である。掘形は大きいもので2m以上あり、深さは1.5m前後ある。掘形は大体円形に近いが、不統一である。この遺構は、東院以西の地区と東院地区を限った施設と考えられる。

SB 8570　8間以上×2間の掘立柱南北棟である。発掘区以南へ張り出すため、建物規模は不明である。桁行10尺等間、梁行10尺等間。

SB 8571　4間×1間以上の西廂付き掘立柱南北棟であるが、発掘区以東へ張り出すため建物規模は不明である。桁行8尺、梁行7尺。

SA 8575　SA 8574にとりつく南北方向の掘立柱塀である。同方向塀SA 8573と一連のものである。東西方向の塀SA 8574と接したところから北へ4間のびている。柱間10尺。

SB 8618　3間×2間の南北棟掘立柱建物である。桁行6尺等間、梁行6尺等間。なお、D期の南北溝SD 3236で妻柱が削平されている。

SB 8580　11間×3間の東廂付き南北棟掘立柱建物である。桁行9尺等間、梁行10尺等間である。今回の調査区で最大の規模をもつ。身舎部分の南妻柱の柱抜き取り穴の埋土から、天平十□年の年紀のある木簡が2点出土した。従ってこの建物の廃絶時期を天平末年と決定できる。なお、東廂の側柱は、北から5間分を検

出したが、それから南については、E期の石敷溝がこの柱筋の上に重複している為に、3個の柱穴については、未検出である。

SB 8578　7間×1間以上の西廂付き南北棟掘立柱建物である。発掘区以東へ張り出すため規模は不明である。北側柱列はSB8580とそろう。桁行9尺等間、梁行8尺等間。

SB 8582　1間×1間の掘立柱建物である。桁行9尺等間、梁行9尺等間。

SA 8572　SB 8571の南にある東西方向の掘立柱塀で1間分を検出、柱間8尺。

SA 8573　SA 8574にとりつく2間の南北方向の掘立柱塀である。柱間10尺。

SA 8574　SA 3237にとりつく東西方向の掘立柱塀で6間分検出した。柱間10尺。

SA 8576　SA 8574から北へ18m間隔をおいてSA 3237にとりつく東西方向の掘立柱塀で7間分検出した。柱間10尺。SB 8580の南側柱から3m南に位置している。

SA 8579　SD 8645の布掘り地業の上から掘込み、SA 8581に3間分とりつく南北方向の掘立柱塀である。掘形は直径1mの円形状である。柱間10尺。

SA 8581　SA 8579にとりつく東西方向の掘立柱塀で5間分検出した。そのうち西から4間目の柱穴は、E期の井戸で削平され、検出できなかった。SA 8579の掘形とは異なり1m以上の方形をしている。柱間9尺。

SD 8615　この素掘り南北溝は、SA 3237にともなう溝であると同時に、この地区におけるB期の主要な排水溝と思われる。かなり削平されているため、途中途切れ途切れの状態でしか検出できなかった。

SD 8647　この素掘り南北溝は、SB 8570に伴う雨落溝と考えられる。

SD 8616　この素掘り東西溝は、SD 8647と接続しこれと一連の溝である。

C　期

B期の南北棟から東西棟へとこの地区の大規模な改修工事が行なわれ、以前の状況とは全く別種の建物構成の遺構となる。いずれも同一規模の建物が6棟、それぞれ4mの間隔をおいて、南北に整然と配置され、もっとも官衙的に整った様相をおびた時期である。又、東西棟の東側柱の柱筋が東一坊大路の中心線と合致している点など、この地区の敷地地割を考える上で興味深い。この時期の遺構には、掘立柱建物6棟、掘立柱塀3条、溝2条がある。

SB8590、SB8591、SB8592、SB8593、SB8594、SB8595　これらの6棟の建物は、5間×3間の南廂付き東西棟掘立柱建物である。各建物間は、いずれも4mの間隔をおいて整然と並んでいる。桁行10尺等間、梁行9尺等間。

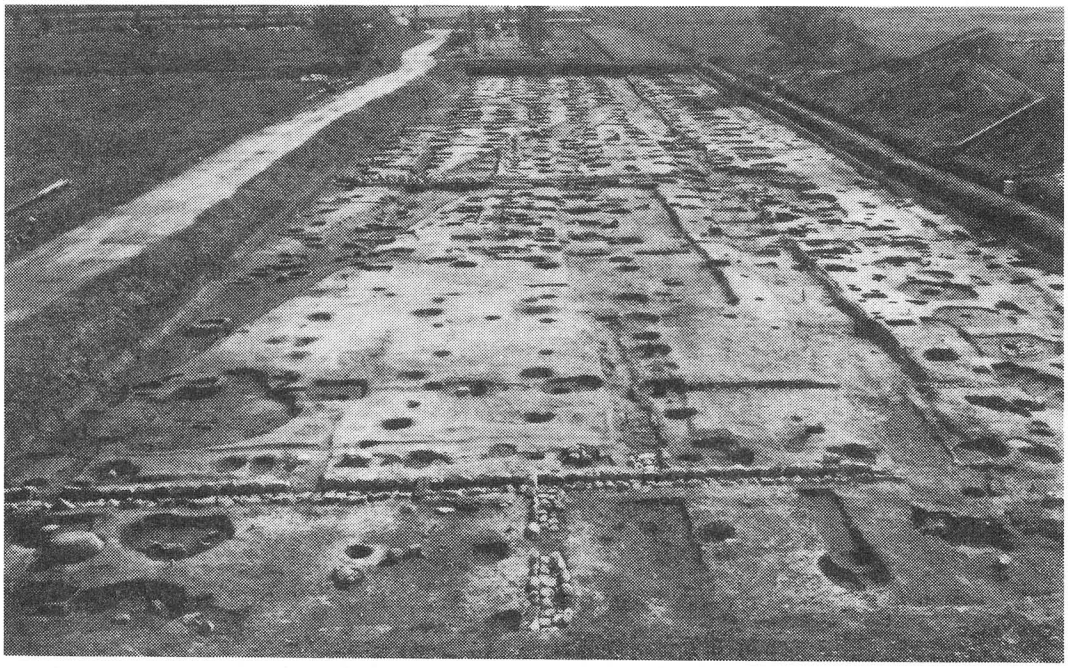
SA8577　SB8592の東側柱から2.7m東に位置している南北方向の掘立柱塀で北へ10間分検出した。南へは、まだ続いている可能性があるが、発掘区外のため不明である。柱間10尺。

SA8596　SB8595から北へ4m間隔をおいて、東西方向の掘立柱塀で7間分検出した。柱間9尺。

SA8597　SA8596から北へ約16m間隔をおいて東西方向の掘立柱塀で7間分検出した。柱間9尺。

SD8644　東西方向の素掘り溝で、SA8597にともなう溝と考えられる。

SD8615　B期のSA3237にともなう溝であったが、この柱塀を廃絶した後にも存続し、この地区の主要な排水溝であったと考えられる。



第3図　第104次調査区全景（北から）

D　期

発掘区の西よりの南北溝と、これに注ぎ込む玉石敷溝が作られており、この地区の計画的な排水施設が最も整った時期である。この南北溝の堆積土中から多量の土器、木簡等が出土した。これらの遺物は奈良時代後期の特色を示す。この時期の遺構として掘立柱建物6棟、掘立柱塀3条、溝9条がある。

SB8610　7間以上×3間の東廂付き南北棟掘立柱建物である。検出した29個の柱穴のうち20個の柱穴に柱根が残存していた。桁行10尺等間、梁行は身舎8尺等間、廂の出9尺。南は発掘区外に張り出しているため規模は不明である。この建物には、桁行に2間、1間の単位で間仕切りがある。

SB 8609　3間×2間の掘立柱南北棟である。　南妻柱は未検出である。桁行8尺等間、梁行7尺等間。

SB8612　SB8610の北にあって4間×3間の西廂付き南北棟掘立柱建物である。桁行9尺等間、梁行7尺等間。

SB8632　4間以上×3間の南廂付き東西棟掘立柱建物である。桁行10尺等間、梁行は廂の出10尺、身舎9尺等間である。この建物は東の発掘区外へ張り出しているため規模は不明である。

SB8640　SB8632の北へ6.5 m間隔をおいて4間以上×3間の北廂付き東西棟掘立柱建物である。桁行10尺等間、梁行は廂の出が10尺、身舎部分が9尺等間である。SB 8632と西側柱の柱筋がそろって同規模の建物と思われるが、東の発掘区外へ張り出しているため不明である。

SB8638　6間×2間の南北棟掘立柱建物である。桁行10尺等間。

SD3236　この南北素掘り溝は、第22次南調査によって確認された溝と一連のものであり、今回その南延長部分を約97 m検出した。この溝には3期の区分が認められ、新しい順にA・B・Cとする。当初の溝SD 3236Cが一番大きく溝幅2 m深さが0.6 mある。西岸においては一部細い丸杭を溝に沿って数条打ちこんだ護岸施設が検出された。この施設が西岸すべてにわたって設けられていたかどうかは不明である。この溝から出土した土器は平城宮V（780年頃）が主体である。

南北溝SD3236Bは、溝幅が大体Cと同規模であり、深さは0.5mである。この溝からは多量の須恵器、土師器が出土した。大部分が奈良時代末期の平城宮Vに属する。又、約60点の出土軒瓦は平城宮Ⅲ期に属する。

溝SD3236B廃絶後の溝SD3236Aは、溝幅0.9m前後、深さ0.15mで当初の溝よりかなり小規模なものである。この溝から出土した土器も平城宮Vに属している。又、SD3236B・Cからは157点の木簡が出土した。そのうち年紀のあるものは、天平勝宝から宝亀6年まで8点あり、奈良時代後半のものである。

以上、南北溝SD3236は3時期の区分が認められるが、出土した土器、木簡からみて、それぞれあまり時期的な差はなく、奈良時代後期の溝であると決定できる。

SD8620　発掘区中央よりやや北でSD3236と接する東西方向の石敷溝である。側石、底石とも残存しているところは、6.5mばかりである。溝幅は0.5mで、SD3236Bに合流する。側石をすえる為の掘形は、深さ0.4m程度である。

SD8629　SD8620のすぐ南側にあって、SD3236Bに合流する東西方向の素掘り溝である。SD8620よりは新しい溝である。

SX8666　SD8620やSD8629からSD3236に流れこむ際におきる浸蝕によって出来た撹乱部である。この部分の堆積土中から、宝亀五年の年紀のある木簡が出土している。

SD8624　SD3236に流れこむ東西方向の素掘り溝である。

SA8660　SB8610の西にある南北方向の掘立柱塀で2間分検出した。柱間5尺。

SA8617　SB8612の北側にある東西方向の掘立柱塀で4間分検出した。柱間寸法は西から10、10、9、8尺である。西から1間目と2間目の柱穴に柱根が残存していた。

SA8654　SA8617の北にある東西方向の掘立柱塀で2間分検出した。柱間9尺。

E　期

奈良時代の終末期にあたり、遺構もまばらとなる。建物規模は小さい。この時期の遺構としては掘立柱建物3棟、掘立柱塀2条、溝13条、井戸1基、石敷面1箇所がある。

SB8611　2間×1間の東西棟掘立柱建物で桁行は西から9、10尺、梁行10尺。

SB8613　3間×3間の総柱の建物である。東側柱の柱間は南から10、6、6尺、西側柱の柱間は南から5、5、6、6尺、南側柱の柱間は東から8、7、2、6尺、北側柱の柱間は東から8、5、2、8尺である。この建物の南・西・北には、それぞれ扉がつくものと思われる。柱穴掘形から平城宮Ⅶの土器が出土した。

SB8637　2間以上×2間の掘立柱東西棟である。西の発掘区外へ張り出しているため建物規模は不明である。桁行8尺等間、梁行9尺等間。

SA8663　やや東に偏向する南北方向の掘立柱塀である。3間分検出した。柱間は南から11、6、5、10尺である。

SA8648　SD3236Aの東に位置する南北方向の掘立柱塀である。やや東に偏向する。3間分検出した。柱間は南から7、9、9尺である。

SD8622　この溝は、南北方向の石敷溝である。側石が残っており、底石は当初から使用していないものと思われる。側石の大きさは0.2m前後で遺存状態はあまりよくない。溝幅は約0.3m、深さは0.1m程度である。

SE8679　調査区の東北隅で検出した井戸である。その掘形は、東西幅3.3m、南北幅3.9mで、井戸枠は遺存せず、掘形の中央部1mの範囲で深さ0.7mあたりから、0.3m前後の安山岩が井戸枠をはずした後にほうりこまれた状態で検出された。又、この上部には、東西方向の一条のシガラミを検出したがその性格は不明である。この埋土から平城宮Ⅴの土器が出土し、その廃絶は奈良時代終末期にあたる。

SX8685　直径0.1m前後の石を平らに敷きつめた石敷面である。東西幅8m、南北幅は広いところで2.5mある。遺構の性格は不明である。

F　期

奈良時代終末期の遺構を全面バラスで覆った時期である。この時期の遺構は検出できなかった。バラス敷の厚さは一様でなく厚いところで0.1m、薄い所で0.05m程度である。発掘区の中央より約3m西によったところは、バラス上面のレベルが周辺より0.2m前後溝状に落ちこんでいる。このバラスを排除した後の遺構面のレベルも同じように低い。このことは南北溝SD3236と何かの関連があるものと思

われるが定かでない。このバラス面からは、平城宮Ⅴ～Ⅶ、少量ではあるが中世の青磁、瓦器、灰釉陶器が出土した。従って、バラスによる整地は奈良時代末期以後、9世紀に入ってからの工事と考えられる。このバラス敷の遺構としての性格は不明である。

2　遺　物

今回の調査では、300点を越す木簡、600点を越す軒瓦、平箱で200ケースを越す土器類をはじめとして多量の木製品、金属器が出土した。特にSD6800の斜行溝、SD3236B・Cの南北溝から出土した木簡や土器類は、平城宮の東への拡張時期を考察する上でこの上ない貴重な資料である。

木簡類　木簡の出土総点数は319点であり、出土場所はA期の斜行溝SD8600D期の南北溝SD3236B・C、及びその他の地域に大別できる。斜行溝から出土した木簡は、堆積土、埋め土を含めて129点あり、そのうち9点に年紀があり、いずれも和銅年間のものである。内容的には貢進付札が多く、中でも鍬の貢進付札が5点あるのが注目される。造営に伴なう材料を示す文書木簡もある。また、これらは奈良時代初期木簡の一括大量出土例として貴重である。

斜行溝からは「十廷和銅七年十月□」、（表）「丹波国多紀郡真継里」（裏）「多紀臣大足三斗次金村三斗并一俵和銅五年」、（表）「備後國□」、（裏）「万□里鈹十口」等がある。

南北溝SD3236B・Cからは155点出土し、年紀のあるものは天平勝宝から宝亀6年まで8点ある。いずれも奈良時代後半のものである。内容的には造営に関するものとみられるものの他に、造勅旨省司や春宮の舎人監などの官司名が出ている。その他からは35点出土しているが、そのうち長方形土壙SK8630から出土したもので、和銅、霊亀の年紀をもつ内侍名を記した木簡が注目される。また、B期の掘立柱建物SB8580の抜き取り穴の埋土から出土した木簡は、天平十□年の年紀をもつものであり、この建物の廃絶時期を知る大きな手がかりとなった。

瓦塼類　軒瓦の出土総数は653点であり、そのうち軒丸瓦309点、軒平瓦344点を数える。軒丸瓦には、21型式32種あるが、6282型式が圧倒的に多い。軒平瓦

は16型式30種あるが、そのうち6721型式が大多数を占めている。いずれもⅢ期の瓦である。この6282と6721は東院西辺部で主要な組み合わせである。このことから、Ⅲ期（745年頃～756年頃）にこの地区で大造営が行なわれたと考えられる。主要な出土品は、小型緑釉塼、緑釉平瓦片、刻印瓦（「真依」・「中臣」・「宗我乙」や「神人」……）、鬼瓦（完形2、破片1）がある。

土器類　須恵器、土師器の出土量は平箱で213ケースに達した。特にA期の斜行溝SD8600、D期の南北溝SD3236B・Cからは豊富な資料が得られた。斜行溝からは多種多様な器種が見られ、わずかに古墳時代の須恵器、埴輪が含まれている他は、平城宮Ⅰ・Ⅱの型式に属し、奈良時代前期のものである。この堆積土中からは、唐草文を箆書きした須恵器の蓋、同様な唐草文を描いた鋺形杯の小片、11点の墨書土器が出土した。

南北溝SD3236B・Cからは、奈良時代末期の平城宮Ⅴに属する土器が多量に出土した。墨書土器175点、線刻のある土器18点が出土した。主要な物として、二彩の鉄鉢の破片が9点、黒漆を塗り重ねた土師器1点、土馬1点が出土した。

木製品・金属器　木製品の大量出土場所は斜行溝SD8600と南北溝SD3236で曲物類が多く、櫛、糸巻、木皿、琴柱等が出土した。金属器では、管玉、飾丸鋲、砥石、銅鋲、銅線、金箔片、鉄釘、刀子、鉄鏃、和同開珎等が出土した。

ま と め

今回の調査によって、東院の西辺における遺構の変遷過程を摑むことができた。東一坊大路に相当する個所で奈良時代初期の斜行溝や長方形土壙を検出したこと、さらに東一坊大路の西側溝とみられたSD3236が奈良時代後期に下る新知見とを併せると、当該地区が奈良時代の当初から平城宮の一部であり、何らかの官衙地域であった可能性は強い。また『続日本紀』によると的門から北進したところに太政官弁官曹司の南門が設けられたいたことが判るが、今回の調査では門とみられる遺構は検出されなかった。このことについては今後の検討と周辺の発掘調査にまちたい。